

シノドスへの歩み みことばと共に 四旬節第四主日C年

小西広志

2022年3月27日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は、2022年3月27日、四旬節第四主日です。主日のミサの三つの朗読箇所をシノドスの教会の観点から読んで、味わってまいりましょう。

過越祭を祝った

第一朗読では、ヨルダン川を渡り終えて約束の地で新しい生活を始めたイスラエルの民が、過越祭を祝った様子が読まれました。荒地での40年に及ぶ生活は終わりました。もはや彼らはエジプトの奴隷でもありません。不平を言ってつぶやいてばかりいる奴隷根性にそまった民でもないのです。新しい神の民なのです。そのことをヨシュアは「今日、わたしはあなたたちから、エジプトでの恥辱を取り除いた」（ヨシュ5章9a節）と高らかに宣言します。そして、「カナンの地の収穫物」（12節 フランシスコ会訳）を食べる定住による農耕生活が始まります。こうして、古いものは過ぎ去り、新しい生活が始まったのです。あるいは、こう言い換えてもよいでしょう。古いものは過ぎ越し、新しいいのちがはじまったのです。

キリストと結ばれる人

第二朗読は『コリントの信徒の第二の手紙』からです。冒頭をフランシスコ会訳で読んでみましょう「ですから、誰でもキリストと一致しているなら、新しく造られた者です。古いものは過ぎ去り、今は新しいものが到来したのです」（2コリ5章17節 フランシスコ会訳）。主キリストに結ばれて、キリストと一致して古い人が死に、新しいいのちが始まっていくのです。それは今での生き方とはまったく違う生き方です。

この子は死んでいたのに生き返り

福音朗読は有名な、いわゆる「放蕩息子」のたとえ話です。「この子は死んでいたのに生き返り」という父親のことばに注目しましょう。弟のほうの息子が求めた「財産」はギリシア語でウーシアでした。一方、父親が与える「財産」はギリシア語ではビオスです。ビオスには生活、いのちの意味もあります。父親は自分の持ちうるすべてを息子たちに与え尽くしたのです。ですから、死んだのはむしろ父親のほうです。しかし、その父

親が弟を生かすために力を尽くします。息子たちが新しく生きるためなら、何をも惜しまない父親なのです。

まとめ

今日の第二朗読は、わたしにとって印象深いことばです。「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」(2 コリ 5 章 17 節)。11 年前、東日本大震災の直後に当時の仙台教区長の平賀徹夫司教さまが発表したメッセージにあったことばだからです。「キリストと結ばれた人は、新しく創造された人」。わたしは、当時、このみことばに大きな戸惑いを感じました。しかし、津波で流された街、避難所で肩寄せ合って生きる人々、そして福島第一原子力発電所の様子を見ながら、このみことばを黙想し、このみことばに希望を託された司教さまのお気持ちを思い描いていました。

そして、実際、皆さんもご存知でしょう。仙台教区では多くの方々の力を借りながら、教区内の教会、聖堂に司祭や修道者、信徒が常駐しました。その結果、教会が地域の人々の拠り所となっていきました。このような教会の寄り添う姿勢の基礎となったのがこの「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」というみことばだったと、わたしは思います。また、このみことばのご縁で、このたび、新しい司教さまが仙台教区に着座なさいました。みことばのもつ力のようなものを考えないわけにはいきません。

もう一つ、今日のみことばで味わいたいのは、福音朗読の「放蕩息子のたとえ」です。もう一度、ゆっくり読んでみると、あることに気づかされました。ここに登場するお父さんと二人の息子、弟、兄の家族は、ほぼ人間関係が破綻しているように思えるのです。「放蕩息子のたとえ」ではなく「ぐちゃぐちゃになった家族のたとえ」と言ってもいいかもしれません。

「お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください」(12 節)は、いわゆる生前分与のことです。しかし、父親が生きている間は分与された財産の所有権はあっても、分与された財産の処分権はなかったそうです。しかし、弟の息子はすぐに金に換えてしまいます。兄は財産分与に抗議して、受け取りを拒否できたはずですが。そうすれば分与は成り立ちません。あるいは、弟の息子と父親との仲介役として財産分与をやめさせるために努力することもできたはずですが。でも、兄はどちらもしませんでした。兄は行動をしなかったのです。それどころか財産を受けとります。このあたりから見えてくるのは父親と兄の関係、父親と弟の関係、そして息子同士の関係がうまくいっていない事実です。

弟は大飢饉で食うや食わずの生活を強いられます。「もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」(19 節)は、回心した息子の発言と理解できるかもしれません。しかし、当時は雇い人は雇い主と一緒に暮らすことはなかったそうです。そうしますと、父親との生活ではなく、別な家で自立して生きていくことを弟は考えていたとも理解できます。この弟は、財産を無駄づかいしてしまいました。何もかも失ってしまったときに「ある人のところに身を寄せ」(15 節)たわけですが、この「身を寄せる」は膠(ニカワ)を意味するコウラから派生した動詞、コッローです。つまり、弟は人を雇えるほどの金持のところにしがみついて生きていこうとしたのです。ですから、この弟は、とても自己中心的な人物なわけです。

それに対して父親は財産をすべて分け与えます。先ほども申し上げましたが、ここでの財産はいのちとか生活を意味するビオスです。つまり、お父さんは自分のもっているものを与え尽くしたわけです。そして、「息

子を見つけて、憐れに思い、走り寄って」(20 節) 行きました。父親の方から関係を結ぼうとするのです。「雇い人の一人にしてください」という弟の願いをさえぎって、良い服と指輪と履物を与え、喜びの宴会を催します(22-23 節参照)。人のよいお父さんです。破綻していた人間関係をもう一度作りなおそうとするお父さんです。

まとめの方が少し長くなってしまいました。教会は第二朗読にあるように「新しく創造された者」の集いです。と同時に、いつも「新しく創造されつつ」あります。そして、教会は壊れかかったものを再構築する力をもっています。とりわけ壊れかかった、あるいは壊れてしまった関わり合い、関係を修復し、結び直す力を秘めていると思います。福音朗読に登場する人のよいお父さんのように。

罪人であるわたしたちは、こういった教会に秘められた和解の力に気づけないままにいてのではないのでしょうか。

それではまた来週。